清水物語　下

清水物語下向

態と〳〵物まうでする給くの中に。上人と
物ほしきやうにんだちがうぐんぎ哉のこう
進けるは。外典のぐまんも見えくせ物かくは。以へ
さても。三綱五常のあらそひありはすぎたり。三綱と
いふは。君臣と父子と夫婦となり。此三すぢ
申は。仁義礼智信の五つ也。つねをおこなふ人を
いひけるなり。これは世によりわざらの事也。
うゐてんぺんの世は中は夢まぼろしなれども
くはしくはみえたる事ゝなり。あるべけれ
なまめかしきことは。さのみ入ことはなれぞ

さかりあさがほの露はつかのまのことし。
たとひ百年のよはひをたもつとも。ゆめのまの
わかするべし。ゆくべきにはきたれる者ならずまさきへ
もしてげ世のよしあし何に付てもつゝ
事なり。五車の書をよみし人もつゐにはうり
みな後のことをきかんとて詩経つくりしをり
きし人も自らの筆をもとめてかんまの帳
あるおほくの経をかきのこせし自在天も詩を
はくり文をかきてべうびんきようの
おやまりとくやよて三仏聖乃えんとこそは
がうれうまじりげ世の事にんをもつて

ふんとりハ来世のなりゆきをたすけ後世
を祈りつまりへ仏法には三つをも五常といふ
ぬまをかけりさけへしまつ忠臣とは
君ハ忠とほとのみちをまもりて志くする事
すりげ世よわりくさよて主もわれわれさまれ
もわれ千万人の主君となす主人もつかり
の後ハ敵もさむしひとりむまれくるとりゆく。
君もまた臣下をなすさみちよわかるゝしかれども。おのを
どもおもひすれど臣のたまもりてつ
ぬまえなすし。又親と子ハ一世なりちぎり。なかれ
おやとのへまのまなし。おやのまをれまても子を

かゝる善気よりむする露(つゆ)なれバとしへえんよりふかき
さればやとハひとり子ハ三りゐのくひりせなり。
おや子のみちをはなれても未来(らい)世(せ)のさかめふかき
かゝる夫婦(ふうふ)の中こそ誠よりひかれあふねなれバゆかり
川のうゑんもま夫婦のわするやうなりくぞこそあ
これかなひのうねとなすもまず三りゐちきん
中よ後(のち)ハ世へよくはまめぞりとも風(かぜ)よ波
ぞ人とそかひのきえぬぬるをそのことなすれ
きそんての後(のち)ハりくせんなどなきよれ知れて
身をかろ義称ひとあへとすくめぞり　志あし
ずとも縁海とくハぬへとももなきなくて

川をこぐりかなかなくてうき世それと云ふ
ましきり来世(らいせ)のしと称ひはとまもおすゝむも
ゆくみちかくしもとそくいかのれしかものとぞ海
えぬまきりそ世の舟をわたりぬくぞ海
とまさりそのさまたに中よきてありけれ
と思ひかやくかつらくこそ中め舟まよ
とまよのりてハ中さけはまぬちはまゝよ拙この
みとかよりぬへ三綱五常のみち全うれな
おゝ来世よりきかりとらもぞれまて中さつ
うぬちまよつきたとらぬへ三綱五常さへすた
さ海りまかれバ来世ハあらくふとわれと練くもわ

是およばずながらもいひつたへて孫子に色をま
まもなしゆきさきこゝろよりて悔りなし
人もいまだよきすゞゆき座ずすみちやさこそ
君につかへまつる臣のみちすくてはしせよ一日もた
てりがたし。君臣とは上下のみち位をさだむる
ゆへなり。上下の位すくなからずあめつきわけあり
もとよりのまつりごとわかれひとつさのこゝろへすとも
其人のようわかれかならずうるへし。上下も其の
ちかそ人のみちはさかりける也。又親子のこゝろな
くば孝をさだむればよ父母へし人のわかれは親や
とはこそおまへのちとまてもぢと思子を

の婦も孫もふしぎにたくるわき人も子孫
はなめと姉よはわこゝろや弟とうもくもつむ
里とすゝめくさんとすてゝ父斗よいのりせし
とおやのふめ婦くすや帰とり姉きたる
しきとすくさまめしあへしとそすく姪
第く御そなれや家有婦る時よきとん
みつもいとみんと婦へきせされば父や
のどんなもすてもとくいへて孫なりやう
行ども婦へるくちの下よりみそりのいま
財とて稽さられをせさきて他人ハ親なり。
又ゆゑ自よりきのものもんなしみとく母親

ゆくへいひ侍る様これもむかしとなりつるさ
かりとひとつもおなじね也。これもいつはりと
出家とえらぶ文字の道は、なくてもよかる
むしろ男子半もありもこそせめ。仏(ほとけ)といふを
そしといつも人の子なれはなすや。文字のみち
ならば百年五十年のうちにハ出家(しゆつけ)もすくさい
家(け)もなくなりくずれくらへきさましやうなく
こ仏(ぶつ)法(ぽう)ありても、なにのかひせんぜうかはよ人すく
ハ凡俗雅原とかたりく五ことくもされかう侍ん。
色とひ人ありとも、これ出家のみちより入侍らん
ハ何と律くりもこれもなくしてぞ候

出家を離るるは僧の中にもうちには
まじはりもあまりこそ出でいは木の葉やこもそと
きるへきみちせちハ有りわりくま婦のみちをとも
てよむへからずてもなくぬにすくにはなるへし。
天地(てんち)とぬるふのおもりみとして鬼神をぞ
ありかくとしるぶ律だにさへそふこれこまつの侍る
あり出家せばこそ縁ハ浄くとしみてあらいつりや。
上人もうちそていはく、其身(そのみ)ハなにかよ志つぬ
ぐちの人が衆生(しゆじやう)をいふのなりて侍るの
愚かなる人しばし法の情をとてもきれちご
なくなりめちくるとの世の世界にけなくきり

みぐるしきかねをすゝめて寺の建立させいふ事は万地
ならず佛にはならず出家も檀那もきらはずとかくみ
まよひて僧どもがくらしてこそよけれ建立せぬ
みちをよくしりても来世の事はおぼへぬ
しきやうもんはむかしのごとくせんさくもなし
まことせいの母をもいつくしむこゝろなく未来
世をおそれず出家のわざにつきても後生
ともいふてもその何かの六道の沙汰
なくして耳をかたむくることもなくあはれ
わが身にも其の道へはかりにもかへ
すゝみの心をもてすゝめとのたまへ

建立へとも此方よりかやうの事は只理の道
を出家にはこれより其方より仰られしに
まことに人の心を身に仏理にかなふ縁
を得て此身は佛と一体せられし
身をもつて心をとゞむる仏のこゝろをいふ
わがくるしみ銭の事は心の中の一心
つまで佛にならぬ心とくるしみのはて二河
にくゆや三河の事をおもひて一心といふ
まちがひし身もいくら佛にならぬ
もくるしき銭をかけて仏といはれぬ一心がま
さくるしきとて佛にならずとも

かせんはいつさいゆうそゆくは一文仏よりおもむ再檀
まつりごとをそこなふとぞいへる僧をくやうずるときは
せられ候。これハミれ金銀米銭なくハかなふべからず
も米をも此世の重宝なれバまうけおくハ一也
此世をすてゝ来世の檀をまうけるともほとけ人よ
いのちをしなすきりをとりぬるものといふなりて捨
もしかゝるりんとの心持になり上人こそみるを
わかれ人を世あんずてハよにふかくても生わかれと思
ひとつもぬハ悲しきハよくつきされぬ木ハ根くの本と
いひけるに持かしぞれも情のこゝろをとりかゝ捨つ。
此方のやまもすこしハ耳をあけられよ命を
もちよそいるゝハ的のまことのわりハよくもかなし。
まつ手前男もちまことそうけもかちれなかるハ
為にあてらよりをもれ大事の事をかくすりて侍りけり何
ほとり的よ作てんと思ふもよきおかへくハよろしく
まいへ一此世のくれ手前さんにへよく候へもしあらバ
まことに候て仏道ともとへ弥陀も又浄土への手
前れよろしく人あふけなすところへ至るにも手前
ともに理非をもまぎるへきも後世盛後を称
かれハ自的をもちて手前わがかきなきとも
当へ一百よ一句もわかつくりいハまたかくはかし世の
さかりれちがひさうのかなしきはかりゆゑ来世もまつすれ

りんと。上人あそばしけるは。上人はよく勝
とすへく。尭舜の屋うなりける人をともからとせん
そうのまねをもしつ。又はぜんさいのかれをさとし云
かりほねにこときれ悪人すゝめても鬼のなしき
す。佛をもたしなみすまし。現世わんかんと
く。萬災難をのかれ。此世すてはむかひのらくより
こり。仏より見おてぐひ一つつまて仕合よく家も
ゆくへ。来世は。七宝ちりばめのまきの極楽
まとゐにあり。是を二世安楽とや申候とは
今までの罪障ふかき人なりとも。ぜんあくを定
めしへ。又は念仏をとなへ世もゆるしもめでたく善人た
るへし。此世みちをもとめさとりても。仏の本は仏
の方便にて侍り世の正直なりこそよまれず有無
法は大経の中にあかしたるの仏ありわりこの中なく
いふ。釈迦こがくもみもさやしに参るとせしとも。
何の事も人は法にせりかのぐしやうちつくしもよ
今の世の我世ははれしうに仏しきにまつ
仏と志んらうする人も心の災難をのかれ
ほとけもあり。是僧は仏かけの仏のちゝなし
て。万女災難をのかれて。一刀きりころ
されもまぬるのに後生は。かれは念仏
なととなへ。ふかくこゝろさしのせめてはし

はへりて、まして刀よ手鉾くれも僧は
ましてまくおけられずり心づうじめんたうきる
殺生ありはすまじき事のはつる命にも
殿くさせみとをせてうこそかいなき鳥えり
こ由石代わそりめく鳥はなけもれよめるとくめ
爲人わりつれも、め人さふくいまもくだけ拙ぞ。
きごく姫しさそとに爲事は、お海こやなすき
事られその老人きいてよのき不露めくきそ
はへお御とやせも鰯のう殺も佛はなり
なぞく思ひくぼ未れきれ石のうけもたうせ
見すぎしめつりこわきのし又すきとやせも。

神をなく佛もすく天がしもなしゐるくいて
さみして拙よし座づまきぎういざされば。おろふ
てもはつすはきめくもはつすとやせむ。中姫
殺りとつるのめてましきてえ凡。やま
まんとすれもりとむりし。ぞりなりやそし
くの人のれつしはど。すてしは物語すへし。
よ徒つれ事みなつぎせどくなりひへぽま
きそきごくともぽ姫しぎともつ一代まの。
見すれるゝ事ぃ、ふしざふなすきとせびみね
まぬしわれもきごく姫しざと思へ事は
くは。其子細はるれ宛とづも姫しぎめくは

いずやおさめきよらみするゝるゆへはきぐく
さしもおもしろぬふくゝそのへざりしよてよそきこ
ふしぎれ事一すり奠の水をすゝむとも草木
の花をそろく深くすゝむとも何者かはよろこぶ
また工(さいく)といふ手すともしてぬゝみなれつしぶ也。
これからこれも天地(てんち)のうちよりぶれがすなと
ともしぬふつぎきたなしにかどもまへしと心は
すへてちよつよわが心はぞてほえらま一ぬ事
わしむみするしきくすれぬすてこそあれとり
と思ひわすり候しもふしぎふくしきざくり
てもいの候ましきとさへし。石(り)物(かの)とりへぶり
あどとふしもみまのしきことく地ど残く色ふ
すこれぞ何のゆへよかくのおどくお命どと志りさ
或人ありとひあしれはゞぐひまれくゆくへ下。
その時狐狸(きつねたぬき)の志わさ海てもとへおとつり
ともりぬきてし地ど私く事さ雅よめしぎど
色くふしぎいおすれぬまのとききくなま一ぬおと
なりと地人もきどくをふしぎてすも神怨
事も佛のぬしもさぶどくなりてばは海ゝと乃
わよわしすきくなすきりみぬき必ずや
地ろへしゝ何事も南どいすてしろても慶かゝ
ぬきすかくまれすゝ人とおぼしくだたり

立ならひ居ましまして。時よりいひきかするぞ。大
聖人とうまれし人にても。大悪人とならせられば
人は生れつきは何方でもちりひとつの事までもいやだ
答曰。大善人と大悪人も生れつきかはるもの也。
二人くらべてみるに何も悪人の生れつきは一さき
はなしてみるものなり。其まゝしらべにみな
悪ところはいつもの所そとりよ有。よろづの事さし
律くやうかりしくほどむかし人十戒のこしてく
おほせの事もえすてまつりきゝ撰の気
すこしも法人はすぐれ悪んせいありてくわし口
おりせぬ通りに困とりし人をとゞまりくすりの事をと
このミ人はめぐまくすし病事とよりつゝひ人の
あといりどきいれども。是れはとりあり嫁るなり。樂
紂と共に悪人のかまくぶ是なり。志の人はいまく志へ
うらも聖人もはらくもなく。無調法なりし人り。
た答曰。聖人とうる人形ふとてはやうにまへさき。
はらくうしに気ぎず我祢よいまくな嫁りをされ中も。
ちるとくもれとぞ総わりてもちをひやうらう
みて一きは地とうしろやうなすり所うつ川く天よ
つまり毎日通すり。又四日是つゞしむことべし見
しぞ祢ヘしなすりがらくいや答曰さやうよ紛
考ふ事ゆくは彼くほせいけんの心を鏡ちん

そこらまはれどもくらべ柳あとにさとくらあはれげ
さやうに物こゝろあくまつもつまぬに佛ども、
すぐれたる玉のつやくもなくまことにて
きらずまこつ色くみえさくべしかくあうつりとぞ。
ちゑあくらぬそこぶさへはりもちゐに
私ゐ年あし。人は佛の世をあくさ。藝能な
どにすぐれたる佛ゆひのりといふともぞれぞれて
世識はる佛者は。規模ある應うかひあす。人の
ごくあそぶで。すがかんようはすべき事はいあくに
あるはゞ人の上中下と。善悪と。賢不肖と。能
まきるまのへ行くめ。其行ちゑとあらうは飯し。人
はあとらる佛所もなどにいりくあるやうはみせ
あなりゆめく心は物をかまのへこ詠ぜざるゝあ
いあるす又問曰。聖人より佛にてみ生らるぜよ
き生れつきたる人が何としく佛所より悪人と
いあくされるや。答曰。一念わやまりやすく悪人
とハ私まうなり。其一念をとりて是れども。衆生
つきれよきはれとぼまくはれはあらて佛者
私と思ひ物とにはざきあうとのうし。衆に
あす者あれども何ゆゑよあすこうこそねこ。人
をこゝろつけくよろこひとし。志識あてむ中へ入。
諸人もよくついちゑれをうれはあそれ。いかさげん

そこなひしと思ひ。ほど経(へ)てよりくよろこびなし
娘は事はさとりめでやしにて三銭を娘み(み)の
ようきんをすゝむるよりはよく心得べし。
天をも人をもしかたなく。いさめ残す人も
なくてまづ家はなすの事は日々によ津のりて大敵(てき)
人とすれり。命(いのち)をも小人も思ひとゞまる。毒害(うき?)
前して永代(えいだい)は津ぎの事は三百余年(よねん)の前
ドにくくもちむの事は娘ぞくて。又何日か都しむ
まれつきの人が何(がの)身へは聖人(せい)といはれ弥(いや)ふ
や答曰。これも一念(ねん)の海よりかはれるなり。是(これ)
小思ひよりは人はすゞれてよくさとも。是(これ)は爾し
為事をやハいのらんか。この人はよくさとめとう(?)
けつまる所はなくてかなはず。よくとも。大石はまたも
色くそむかぬかと銅(かね?)又よくてゆきぬ。天道(てうどう)のさ事
いりをきるれん人は天下におされかれんと聖の
すゑ山の所くまでもかくれぬ人までも代(よ)より
すくちかづ事。天下のちゑをおしめて一所(しょ)に
まがちゑをもちひく山のごとくにあつく。海のごと
色有り娘のき大徳(とく)となりて人を聖人と云也
文王(ぶんわう)は聖(せい)人ありしハ。物(つう)をかへ太公(たいこう)望(ぼう)まで
をこづかみ[illegible]もかりきたりてのせつく海り十
人の大なる人をしたへて臣下としてもちひ給ふ

少へば八百年の天下をたもちたまふ。其外
は薪をこり。自身をし牛をかひ。孝徳の清浄の
こゝろざしありて。聖賢の代々にいたるまでおほやけ
と徳をなすがゆゑに。おのおのこころざしいよいよ深く
く少くかんくとしそ命をたもちしは八百年へ
またる殷ハ六百年。文武宮百年。正木代の律の分が
く法をとりぞすその代までも聖人をもちひしゆゑ
うとくをあつくしかきなりき。これハ一念の仁の徳
ゆゑよりおこるかのすゝや。堯舜すも天下をゆづる
恵ふちハかしもおもらなり。國をも衆もしの人が
これをぬハ仁をもれども一念の忠をたろ天下のあやまち。
ひきもしくたもさ滞りあるべきにまれなり。又問曰ハ
これ大人の事也。賤きことをさけ老も賤より下
なりち恩ハおほきれどもいへなり人もすくなし。
賢人を生まれ色義も其身をつゝしみ
よひぐらし。是ハいつくしてよくいや答曰。ほどく
まち恩をくり海を取まへし。よき知恵をものゝ
めぐし。ぬかまのよしのかしとかくりつ合くるに
學人をとりくまうとも舛ハし。又ち恩代あるい義
者なりとも。礼を志りへ人はよろ川の不徳
をつへし。礼とりふもかうの礼すもつゝす。自然に
礼みもおゝはぎをりれ年を志り孝礼と云

ありがたきをとく〳〵ごとく申されんハ、むかしの
まさしくよき事なれども、昔(むかし)やうなし。當世(とうせい)に合(あは)
ぬよき事をもしるこゝろへし。掲げしハ、心とを
ありくしたる人へむかしハ、かはりてもこれ礼
なり。是ハ世間(せけん)にまかるもの〳〵ことく人を
志ある事なり。かくつもとて物のこゝの事ハ
これよきと思ひこハ大きに事わるし。たゞ
物のよき事のさわりとなり、よき人のいふ
事をきいて、我が心にたがふとも我をまげて
もちひぬべし。しかるに人に物をいはせて

ゐのとゐりくらぐ人のよきあしきをしらず
たゞとく〳〵あすといへり。又問曰、さやうの人もある
きよく録すそてハ、いかゞせんや。答曰、年のよりたる
人にいかゞすへし。又問曰、是(これ)大きおもく
答曰、よろしき人のけうわるき人にたちけうしな
まさく。まれハ年にかかはちをとかくま
まぢ〳〵く天のミちをもとゝいてたゝ
色十分(ぶん)に我ひとりをはかるすへくぞくわが
身にせんをやくすおとくぢさげしをする武
士(し)ハ人にすぐれくすむへしぞれに功(こう)なり名
をげて後(のち)に身もまどくハ天のみちならへし。
馬(むま)追(おい)をもおつまりてかゝりけりハ、よ録あし小

八千里をもはしるときく。ましも千里を
くはしる一足のしやうじにくに里のろちんをつきそ
もこひたらんハ。さ人まことそたゆへきれとも。一
人いまくはるゝ千里代馬されもとて千里いり
色ゆごがかりんやうあまりぬしく足のふんつまづ
疑こそかつまく。それ千里のはかりとも思ざ
なかゑへし。其上千里の馬ハゆくさハ世ほくも
見えかつかきゆへまうまぬしり座ず好み小男の
ゆくかハれもぬときくぞりとまでの座せるこ
そましなすりんとの。父一人のまもくはるたちわ
くるしくもちそこのれんばかきうけ武士は御出生
此も世ほくかりてよき大ねのもちろ御書
寶なる人へしがたれどのかりまづしと座らん
いゐのあくひよぷまやうしもしらく人をもまぬさ
まわくはりけれはハ千里のあまあちん博をも
むといひひるふ世話じといふぷ中き者の中にも
きふもなり出とかく御と思ひてくやぬ茶屋よ
勝けさは人のうちは。おやまりも大なりわや
まりハめわもとくぬが公家かくこよ官とこのそ
ひぷきほしぬ人ハすまれさしも。わがなすりさら官
の左よくしとさずさりても博をもぬ人をもこの
らんつれともさらぬハ世ほしときく。武家の人

人も軍礼とハ知べき事なれども。国中に一人
二人ハありもやせんなれバ志らぬとみえたり。
又僧よりうへハしりたる人多し。一人二人ハありを
やもしれん。御ぢんハ非礼なりけしからやまりハ千
万ぞや。茶盆が曰。此物語ハあやまりなれども。それ
よりちりきたりやまりこそ以人よ生れ来る人ぞれ
るにしらぬ人ハいかゞやいやんや。其身分にしたがつて
此ぞうのはなしまぬ事なるべしと出むかひと
め誠見んあるせんかたりきかせぬ。志れもしたりけり茶
盆をおぼしく語りとききゝけも。茶盆はあるめし
これもわしもきゝめせんもくしよりしの家中にちりせ
ぎうにまかせよりたくもつてまつりて進候と覚
称はるれん狩しきすみれとし。天一人のいふく。物
よしみきさせしこそ侍従。深山桜の花盛りもみる人
もなくちりやまりけれ。既のうちられ古来まつ
きりてやすうつれんさいちも武勇の侍。軍人
みくる年のよの人やいかんぞよかりぬ人よみる宮中
留守中ぞりへなすき着よする家もとよりすれ。
徳の老代ろつけれくぬ事。わ家代武をみめ
よききてよきもめんあひの萬絵。やうの事また
世よわたりんめ宗中也もやとき八徒よ色の月
日。きやうかくたうれわうかくもくのせんさく

とすゑ中よぞすゝみ出て云けるハ萬代の事よ然
わまりにせんさくすぐれまじけもなきまじ
よ那りとも地なりぞされ天ハまろくしてはすぐ。
う留が中へよ天のまろきを地もまろ地の下に
在ぬ地のまて八文天竺ハ天是ハ地
と云まちも此うちまろ移し遠まと鏡さ
天地も而まなり物ぢ人のちゑもぜひ乃き
つまと志ずぎてぜんさく滴りすぐれもくぢ
おすり老とおりとひさみそ是ハうちみる
而ハ分別ある和似て國まてあちゑなき志や
ちとのまれなり是非のはくゐめ鏡よく言ハ
とぼんちと云ありし老やちちある人ハ國のまさに
ひなすりぐちわーそ鏡ろう大なやうハ三んひさ
まゆおとめくまへりれの足まもとひまなり
みり まりきへくろちつれきひきかふ
此乃の善こそ三条の堤まて奔の比十七八も
かりなする書待一人と具そひすりきける物の
こ二三人ともわのくろ刀のきやわさりおるとそ
喧嘩し。三人のかき二人きられ二人も中ける命り。
ましき人の大手柄とて前くよりかしかられ。
五百貫三百貫なずらへよんとゞろ大名ハ
俳しとかうろ。人のつれがいまくぞれもういくし

き事にてゆきたりへおちかねども。大名衆のか
しかられば、そを心わきまへれ、国中の人々いふ
経のまなりましきと思ふそのまゝをとりぐら
れはやそれ於らも一ちきやうとらまれとも小屋
くまゝぬまゝれなすらんかし。又いつまでも用よ
るにまれさせば。是経のまよめ難き候しへ
きはうもりなりがたがられは、そりとその心
しかねば時よりく、鼠も猫よくにいつき犬
も虎とくの事しのりぞやう此まゝゆくとよあ
まれとらりひゞかし。国のはるどのたがひ九人は

国のさめくりとよくたのりたゝ生なかな
人々読そつれ大ねのく、臂善徒れなま心の
めきとすら人正直なる者のやうの者をとこそ
悔くとうるまをめん事すれ。喧嘩の私ごとひ
志うの者などいひきおちあからうち、心れうち
とてもうれくはてすし私じくとひ喧嘩こ
のむ座うふ千万人一目のうちにもゆりぬ。下
國乃物さへりくされ大ねハ国を命やりてもまとめ
まほし儀有しわ来てうろとれわりわくも世るふ
物候さまれよおくとかく名物のことりかふ。幾夜
うかりみゝ名人も一言までもその人山より
も物し　一むまたを物の人々くちくよりひき

為ハ娘りきなすり人の金銀をつかうをみるに何
者よれどう何者ハ物まねとみえ人の心
ざしを志る人ハ又ふんなすり人の心そよりとぬ
に為物をさてそれ人のことよりきそうそれ人ハ
あわれまの為くとりふりをきて其人のりくこ
此ゑる下ハ志る人へしとりて又一人の曰さとしを
なすきまとその心よ座すきとれハりハまず
ふりむかし叔律しとりて又一人の曰柳下にも
すむもゆき者ハ為いくりの心ももゆしと云
又一人の曰りく志くむきをまけをなすき人
有物と為り人ハりんこれなすき物成
律しくはとりて又一人のりぞくそ
よ縁さひ門めらまて物そ為て若ハ此人
りおもへ孔子とするをとりて子つまも
すぐれりる柳ると見てハのこ律志
さひさくゆへ進服するを云
まる方すり人の中よ心為る人とみえて
ひそりん志まつハおい心もさ律と云る
程心へ又をなしく事さすきれます縁と
しみそもよくき事の身一みしくやなし
とりふ中みにこれとそつれ孔子孟子など
をきっれて白しもありてきられハ進

腹きる人多かりけれども重恩の恩をしらず
ぜんとしてむかし奴へ下。命をすててこそ忠
孝ぜんと思ふ心ざしは殊勝なれどもぜん
世間にするふしぎなる理をしらぬこそ
あさましけれ。死すても後よめ。いかにも俗をすてゝ
こそやつめ。されどもさてきゆるなれ
むかしよりきゝては日本よりのかけす。
仏の教にも孔子の道にも。その教へ
なかへるまをなきことはあらず。恩をしらずせん
とおもひて孫よりつたへしむ二のちかひせよと
伝へしてなりすへし。其上にもおなじことを
多る人が。後をきらひ恩をしらず。多る理
わるし。親と子とせんは好きさはなし。人の
子は死れ追腹をきるんや。子は孫を伝ぐ者よ
きらぬと云人わしむ。孫を伝ぬ子は心きる
なきや。腹切く恩をしらずするふしぎなる者よ
まことに親の為に子の腹きらぬは常なり。
先へのき事乃なめり。後きる多る理なれども
あるしまり。又主恩よ奴てもまつしきなる
理なり。是君たる人も臣下の上中下は
思ひこそあれ。いつまでもかげなく思ひ。主恩
は身まへ。命もかけるゝぬとまんなんあり

思ふやうなるこそ侍らめ。さるにてもまことにうしき家の子
多きものは、千万人の中より、わづかに老人二三人
ありて、おのが身をすてゝかゞやかすべき事
を何とやらむ律義にひとへに命をもかろんじ
とおもはれて、いたはしく侍り。よしや腹きらずとも
身をすてゝ主にむかふ理わりもなし。その一家中一人
ものこらず腹ともきりてこそ忠もありけれ。それもなくて
殉死もするなり。それは一人や二人きりては家の
心のあまねく忠の経みえず、心あるべき人のためにも
まもらるべき事なり。さらに追腹きるとても
らちあけたる者はかるがるしくは
家来まかりなる人の恩をおもくしる人はすく
なくきやうにおもはせぬものゝてかなしむ人
の思ひよるぬまもなくて、この世をも思ふ人も
まへし。それとてもよは律とはきまもなき事なり。
天命運命志ありとも、人のすゑにあるも
を運命つきぬれば、鉄炮の中にて
ても死なぬ様なり。それを見ずして死ぬる
事なり。さるに命を捨る事も
志すして人のいけにへとなりて死ぬるは天
命をもしらず、子孫のためにもよからず
しかるに信長公のためよ。尤も

平助が本能寺へまいり法きゝし仕合。むかしさ
ぎよく作もまゐりけれども、どんすなれば
あとよりおりやうのあくびに一筋ゝこゝろざき
言よいのちすぐ気も漏も津め川へとかく
冥ふもも服きゝて入れ一筋も一かへん。
心のうちなりける人の心の山の糸ぐすめぐ
ひろなべうきに世よ中とけしんとりはうぬきを安
くまつく山の中よりきもむすひにをとめ
津らぬ処にめく心あくてのりまきのと
いとむつれの人此曰。無限せひとつ語いやさ
くやどみにせんさ見とさの分別とせ
処川らまかとて無礼とふかくいめ物すれ
をぐまけとをしめ人いや無礼を叩くさひろく処
津らぬとりひ又んずしくさしめ人いやよりわ
ひろく処川の雑の人とゆるすつ又世間可
礼をうし浦とておすこしかく此めく人を
これは諸非礼するれ非礼は処川らの三川すゝう
よ後しかりひて一きいふくさ君のりの心は
おくまゝく処川らのぶぷ処ってお処川の雑は
ぬやゝふこ世や無礼を津くしてすさはきは気
ぞせぞくよりへうう非をも此するへ婦人さ非
雑ま礼を津しく言さんするも礼をこのしゝ

心は色に離ひのはなるゝことなりといひけ
れバ、そのことはりハ、婬りきはしく気をお
こすゆへに、山中にゆりくる心のまゝに食物
をもとめ、えらひかくしてある事をゆるしきたりしや
又問答ハなきものかと人は常に尋
よハ我よりよき者と常につくりよし総者
我より能は常にいかんとおもへど人も又我より常
常にする者によくまつりんと思ふ奥ひに我より常
ゐる者ありてハ常にするまじきと思へも接のなき
いふとき　答曰、何の事にも接を受て我よりも常にいふ
人有ハ、されどもよりものとくらうむかしてのよき人に
我よりもおよふる人ハこらうくらうハかならずものざれ
とも又我より下の者よりのミむるを我とおもふに
ともするものハひしゝ常にされるほどもむれは我ハ人有
まとめ人ハ我とまとめて廣く接なり。我にま
されるとふりき婬きんの事にハいくのしすぐと
くれわる人ハ是なり。さらば常にいる中
有り。賢者にいたりて常にうしぬよまた
すべしまこと是きかりとする事をみて
為る人ありよく云掴ハ物もちかう人ハわるさ
を物もたぬ人ハ婬つよき事も太へ有何ぞの
事もなきもかなしはおそるゝハみな事ぞ姪きをまじき

まゝ此おのれこそどうさんとて。ちゝごうしにすゝり
ぬかるこそ欲ふかきものなれ。すぐさまひきさりつゝやぶにも
おりぬべき事なり。又有ば。すゝめられきおりさゝゆる
思ひよれわかれども。人は。いつれのたゞちにも曰。そう
どてくまれいをすゝめ。此よ欲ふかき老多し。
志かりける程よ欲のすくなき者多し。物と
多くつゝしてもむさぼる心なきと欲のふかきをいふ。
まづ一つ家まづ事りの色老人は志るまきよほうれ我
欲はおそれむさぼる心なく。色にくさきまきさいや
老くはおれともむくべき事おもすゞむきてつゝひ
すこし人はりきさにようへおれとも十方なすし大
名はもつきより国どうしなすし名をとよう
人まそし陸まで。まさりひとまま弱く。大名のまで
つまきりて身上のもて。しかは。古今さうず。欲
ふかく志はすぎくもてゝ無き多し。は身か
無老此老くてもてゝ而老はすくなし。つゝし
すぎして津づまでのは律しと云。又一人の曰。只
娘んさいを主無小すぎ喫。何の事もなづくま
すれむぞしつまもなく。わきまれもすし。身の程
と知よの事一句まて。何の事しもよのきこ緑なる人
しとり。子 もよぐしはよのきん。なる。物はなし、
よかしぬ人とはさしあく無中よ。ひまん志る

為ハみな人〳〵の心ざまハ其よろしきにまよ
き人といひ。我よりもおとりたれどもよからぬ人
といふハひがゐしまさりよのしき人とはいふ。人ある
善悪をしりつまく。餘すへ花てしとのしきをしお
われど。人をまつ万年あまれしてもさ隠がに
人のよし悪しの道をまちつどみまけておしてさし
餘とあらひとまちあやまりすわりもちハ
つまく志そもゆろくゆりつ。霞の中に春のか
花のおもくうちみまて。ゆとやうにしてその
中よ。柳桜の色く。ゆやうにまかれてるそ
ようこ人なるへくたれ人はなと成るくハ
まり新しきおもきれくれすさ有りくへそれ。
その人我おもきとふひとつて。隆むへき有りハ
わらず。又をのくれ佛あらるよ人をまれまくれ
身がしハのかをまぎて。とめもくみともせよ佛つ
する為人をたすんとすまきとふそりやうれ人も。隆
なるよ一切のおひきつ有りハよろれさてもまよがと
のれをあきせとうや。一切れきひ有りハ如くて。
たきみてしもれそろしかとすみてくはのりて
もおくてしもおする。又ひハきれつよのきさ人
ハ為れもしくさしもうすよえつきおれきても。家
の妙さめ國のくもりまハ如くてしよのさき人と

はすかる人のつとめにくき人とわく志ゆゑも
のおほかるへし　かせ侍とみえて一切主
を親としかひけれハ人の臣下ハちかうせり
をおもとすゝ半ゟくるとハきてゆへをも何
とやうなりともちかうせりみてよかれとも
の主君此心をもりかくして其分とこそおもへ
ともかくてもかまふす半まも自をこそせて我ぬ
くかよりて御あしけもなく服もさハちかうせ
けの心ハうちすくとよ其所もあいかいて
皆公もきけまともかくさをせてゆへをまそ
れもなくすのかりとてもさくへのさめ
ま国にてもわかすを乎気のなちらよ
さく取をすハまつなくき志わんあれハ人く達
そのくとふつ主の人にて曰人乃臣下社
三道の人格わり一すハ宗廟の臣二すハ社稷
の臣三すハ家臣又ハ家けハとふ宗廟の
臣とはいふも親せんぞよりけつかる者今此
世よ普代家とふ老すりもハ家のかりくて
もこのくてもその主人の家をもあまりぬ臣
すり社稷此臣とハ万ハ其国とまもり臣也其
国もゆれもさうしちかへハ主君かうあれハ之
なあり其城家ハさうもあれかくともうれし国我

まかる我本とす。是は、今の代までもむき
よりつけをきて国をまもりす、ゑまりか
ゆく也。酒志め、天下一。家臣といふは義をもつ
く忠臣とかりぬ義をもとくさうぬ。今の世ま
まかり出るとりて志めなる。天下一。至忠よりた
のめは陛下とて義をもつく像を入れも像
をやりぬてきく人を見るもといふ人をもえて
こもそくはなすりけしにかはぬきくまて
といふ事はまくしありけまし、ある家廟
の臣一尿奴へしも忠も此心をもえてぬゆくよ。何
ぞうも一夜臣下ゆのとりかり臣へ忠
せんとおもへの人多くし忠は浮とおもち臣へ
とおもほうこそ。忠臣義とおもりく合するたく
のかんりし　牢人とおほしきく人まびこう
侍へまりごぬとおもふせて。座侍りのては座
すへとして町の人くはしきつへ。近年の
来のえるさぬぬす。物毎はえりくりして、すぎ
うきとみえしかし。おさん人ハまず賣志ろう
ゐるの物もえりく賣さよ。ありのよきりくそ
とくもまそ御とみえてり。とおかれしな
其ハ牢人なる人へし。町人まちるをと下さまし。
来をうしかされ。あぎとつのきうを往中すき

半時ばかりかん。罪人には宿もかさね
ざりければ人もこの川ときくぞおそろしき
罪人もみな教のうちにいのりし人々。又は
いはきにあらぬ人の。果をぞ仰られしも。
なきに如何ゆくも理なくまやかなれといふ。
一人答曰。いかにも其道理にあらず。津にいかなる
人は、こゝろされ流されたまふなるゆくへは、いつもあき
らの罪人多し。つきぬる人にもすてまいるなる
ありけれど背も縁にては。殿の紂とて悪王
なり。其臣下は箕子とて賢人なりけるに。紂
は悪王なれども。一度太臣にありし上は。天下

に何の経にもきこえず。二度王にさ[?]
半[?]なきまし。家君の為には王となり名を
きゝしとてがくせいあんにかまへて終に周の
武王殿の紂をうちほろぼし給ひし。箕子を
以て背を世に出して用ひ度思ひ給へとも。津[?]
つまかへひ王とさだまりきといひけるとて
おもひ給ひけりせんとおぼしめすにより経書
よみき陛下とすておきては。紂王とゐ末代まで
いはれじとひかされんとすれば常々の世には
座[?]りかへりとかくしけるも天下の王となりしと
して是を志わたし給ひしはさらに此老を

すてかくべきよりしすとて朝鮮國の王ふ
あしく宮人のおもひしみしてれといめん
おりて洪範より一事を律しへ語り。洪範や
いふハ。天下の為風寒暑皆天下さる人の心を
所しよ御とい一事を志るしたる物の名なり。
天下のふうぞく天氣のありさまをとりて帝
王のほんきをとする綱紀一事をあらし知也。
是よりて分別してきかさくも味方ありとも
あれ韓着をすてゝかくあめしハ。諸朝ふして我
銘々もすしぽうれさらも韓志ハすくなくうき

着ハ例のきぬつくま宮人の衣服きちらりなきうら
とそてもめくたうらんふハ。おりさハいかによつきを
てかへびき。韓ハよききまつひくしるそひありされハ
らへよのうむ人ハお留まりしやうのいかけりさ
れ志ひの心より出て御事すれも。今の代まこ
そくやうの事しもいりぬへうし。座ぞて宮人と
明くすりいれとかへらし。人の目ら人のほん経
有しこそ明くとも。事分ふそも忘る御志ひ
のんをとぽ下くまもとせあしむ。今迄かくハほ
しとい人まで。あふわもとてみ明られまく
織園林のあそりまく。一ふうさひ的射する
人くれいひまるハられもみなむ天下のほ政事也

世の中にいくらもいへども天道といふ人まで。冤有
かの家にこの家の人は此家におのおの何のやう
なる銭天道と云と知る人まれなり。まれ
人の言葉にまへ好ことは。一人答曰。天道
と云も一人さきゆゑ。この家とみえはせぬ
まみちくてめんくの天道まとみえぬさ
して此津くはこの家とれはちてめぐてまつ人の
子なれ者は親とて道とさても。親のうち
とりて筆云するには。重気を天道と云女子
世間とを天道と云是天道のすこし縁なり。
ほんとけな。行天道はおそくにてあるへ
性をませすて天道と云人は。冤よわり
て。人のいのちをきくて禍をおそへ。津ゐまり
あまりすなおと思ふ。少人は。洗米をそなへてくらし。
餅なとを参物にしてろうのをものをと云人
多し。家とひ天道よまとしても。わかけのよね
まめて。餅のり餅をめぐてまくくまりさとは
きこへれんや。人さらも人が御き者はそれぞそ
家らにまします。まんや神仏をやまらく
天道とはいひく。人にはゆりくつ人まこには
すべて天理をもつて天道と云。又曰。忘る
まへ天のめぐみとの世半も天まりといふ半

よはまる事なくはいかんや。答曰。天より理をそ
なへきものこそいかねば。そのさきの理の善悪も
きまりつくのがれなり。其子細ハ。水ハ心のごとく
物にてはへども。水の流理なれはまてもひきく
正しへゆく物にては。水ハ心のごとくひきく正しへゆ
くんと思ふべくはすくはへども。ひきくは流る
理の道にまかせてゆく事なくは。天よりといふ
事も。天は人の為になすり出れのあそてハな
きよへども。悪はいずれの理てられまぬハ
天道の心よりては。火のまゝもれと知けまじのさく
流るも。火有心わりきくこのさくめんと思ふよりて
なくはへども。このさく流るる理有さくこのさく流る
事より。天のめぐみといふも。天は心わりきく。人
の善悪れをんまい形との所よおてがり向よ
くはおそねども。火れそもまゝ物れば。わさて流る
てられぬ所よ。善よハ天のわざひすくてられ
いぬ理すりぐ。ゆうしよき人のよからぬハ
よきことのたゞぬと思ひ道にて。この人のこの
からぬハ。このきわまりてぬ正しと知へし。
く心の道もあれハ。天とても人とまで理なり事
にかゝるべし。家にて流すこのくきまれハ。天を
下陰も人とうもわりもなしや恙くこのさ

ましきゆゑのまひおのもれなり。てかはすこ
おさな心もれバ、子をやりてなりとも心
ねの座くなりわまへ。扨又神の御代中
まさしくて天地の書と云ハ周易のこ
なり。易ハ六十四卦あり。卦よ爻六爻有り
一二三くの爻としは六爻すぢかひよ。爻そう人
も下より又善め。上より二爻めにおゐて、大人と
いふなり。これ土ざて爻といふべきよ。二爻
めを爻といふ心ハ天下國家の爻にのほかも我
一人をちやうよてと思ひ。分別よも位ようとう
ろも栄花みな。爻あり。上のきてもあれ共も。
必天の命もぞきの上のきはめまるうるを
いふ事を忘してくぢて人のちゝやう上をまし。
元龍の悔とすりけきぬなり。元龍とハ
天へのぼりつめたる龍なり。此龍ハもはやおがるへ
き所なき故よ、降るよきハまありのがり
すぎよ悔くとおもといふんなりが大人よ御
人何事も分別して思ひ。分別いはず御
そんじ御しきましときしひよろいまず御と
きはめぬれも。何もすくなきのりておもまる
まするといふ心なりとは聖人も五爻二
まさして聖人分別しやをに御道とおかきしや

まひ給ふ。これ天下をおさめんじ給ふゆへなり。
されども文王下の為にして、人まかせに人もしたがはず門
みすきごとにく、いふまじき事ども不覚
すなはち人まどはれは、為まよふやまひ、れ土へあがり
でもあくまでいはず、為まよはず。縁すべくしてもよ
ろしきことまなはず、道ゆへには為の上ますそ
をへ議の橋をして、為ゆかん人。代々のよの
みすぎたると天下をまかせしと知べし。大人
の心ねなるべし
天下のことまことはなくして、まことの一のされば是。
すなはち半かくしてのち。ことに君といふりそがい
し思ひ半かくして後、かんもはる半ばし。
これぞ天下の心なりきり

寛永拾五 戊寅 十月吉旦開之

洛陽四条坊門
敦賀屋久兵衛

110X
235
2